



全身を黄色いタイツに包んだ凍々しい顔つきの男性が、鞍馬天狗のように笑った後に、右手でSの字を大きく描く。NHKの教育番組から登場し、一世を風靡したストレッチ界のカルトスター。その名も「ストレッチマン」の決めポーズだ。

「会」という関西の劇団に所属する、舞台俳優の宇仁智真。彼がストレッチマンに変身したのは1994年、NHK大阪放送局が特別支援学校向けの番組「グルグルバック」をスタートさせた時だった。

のか。最初に貴重な証言を与えてくれたのは、現在は発達支援のNPOを主宰する、廣瀬正彦である。かつて教師だった廣瀬は、学校放送番組の「番組委員」として、「ダブルバック」に携わった。

はいいいえ、どんな仕組みで動いているのか、ということ意識してない。知的障害がある子供たちは、この傾向が特に強く見られます。一方、麻痺があったり、肢体が不自由な子供の場合は、体の他の部位まで堅くなったたり、動かしにくくなっていくという現象が起きてしまふ。

こういう子供たちにとっては、自分の体
に、氣付き、動かしていくことが重要に
なる。その点ストレッチなく、ゆつくりと
した動きや、静止したような動作でも、体
にかかる負荷や気持ちのよい緊張感を味わ
える。ストレッチは、自分の体を自分でコ
ントロールするための第一歩なんです」

ヒーロー役が設定された背景については、当時ディレクターを務めた平岡ジュンコ（現シニアプロデューサー）が語ってくれた。『グルグルパクション』には、子供たちと一緒に体を動かす短いコーナーを用意して

で、子供たちの自然な反応も得られる。宇
 哲はカメラの隣でストレッチを演じ、
 次のポーズを撮る際にだけ、カメラの前
 に飛び出すパターンも考えだした。

ただし仁に實が最も頭を悩ませたのは、やはり子供との接し方だったという。二こちは明るく楽しく、はつらつと振舞わなければならぬが、子供と向き合ふ際には、細かな気配りをするの必要ならぬ。お子さんがテレビに映るのを好まない保護者の方も、多かったですね。

かといつて遠慮はかりすると、それはそれでよくない影響も出てきてしまう」

「試験錯誤と葛藤の日々が続いたであらうことは、「難しいテーマですね」という問いかけに対して、「ええ、本当に」と深く咀嚼した様子からもうかがえる。

この間の1999年には、番組改編で「ダブルバックン」の放送が終了。宇仁智の「コーナー」が独立し、「ストレッッチマン」という15分の単独枠へ格上げされている。

番組のタイトルは、2002年には「ストレッッチマン2」、2010年からは「ス

2008年には40種類にまでバリエーションが増えたものの、複雑な動きを子供たちに理解させるのは難しいということで、最後は再び5〜6種類に落ち着いた。

それ以上に変化したのは、番組の受け止まれ方だ。ストレッチャの人気は

「もちろん取り上げてもらうのは嬉しいんですが、先生が扮する怪人と対決したりするのは、あくまでも校葉の部分なんです。ストレッツチマン云々以前に、いろんな子供たちが、みんな一緒にストレッツチを頑張

大声で数を数えるのも、
子供たちに思を
止めさせないためでした。



関西人らしい快活な人柄も“遺役”ぶりを窺わせる宇仁智真。現在、劇団「五期会」で活躍しながら、堺女子短期大教授として舞台芸術も指導する。

いました。その体操のお兄さん役として、200人を超える応募者の中から選ばれたのが、宇仁蒼仁だったんです。

「ストレッツでは息を止めない、無理をしない、反動をつけない」という三つが大事になります。番組では『1・2・3・4・

「ヒロールという設定にしたのは、現地の先生方が「子供たちはかつこいヒーローが好き」とおっしゃったからです。実際に『三の瀧』、コミカルなキャラクターになつてしまいましたが、番組の知名度を上げる点では、逆に良かったと思います」。

宇仁智は話を戻そう。放送開始から最初

「5」を教えた後に、「ストレッチパワ」をこの語につなげたという。と言いながら、筋肉を伸ばした部位を意識しながら、大声で数を数えるのも、子供たちに息を止めさせないようにするためでした」。

似てような配慮は、ストレッチの動作を促す台詞にも反映されている。

の2年間は、スタジオで撮影が行われていた。彼に与えられたのは、映像を通して子供たちに手本を示す役割だったため、さほど大きな苦労はなかったという。

しかしストレッツの仕方を伝えていく方

「単純に右、左と言ったと、『足を開いて』と言つては伝わらない子供が多い。なので『足をかかちよ』と言つてみたり、『両手を上げて』ではなく『バンザイ』という表現にしてしまつとか。体を動かすイメージ

とひとの人生

きないと、必死さがでるんです」
字に骨に素材に廣間をぶつける。本業は舞台俳優のはずだ。ストレッチマンをやめたいと思ったことはないのだろうか？
「たしかに俳優業について言えば、極端な悪役が回ってなくなったりした側面はあるかもしれませんが、ストレッチマンが別の

番組で人殺しをしていたりすると、子供はショックを受けるやないですか(笑)。それと45歳で「スライマン・スライパ」が始まる時には、タイツを脱ごうかと思った時期もありました。いつやめるといって割り切ったわけでは無いですが、分

持ちは常にあるりました。東京のスタッフも、面白い番組を作るのはいけど、本来の目的を疎かにしているんじゃないですか。」と教育関係のお偉方に言われたことがあったようす。おそらく番組の意義が正しく

点のようなものを感じていたんです。でも楽しいことの方が圧倒的に多かったし、単純にやっていたそれらは断言できる。大学時代からストックエッジの大ブ

物語る。

て、10年くらい経つてからでしょうね」
宇仁菅は2013年、後援番組の「スト
レッチマンV(ファイブ)」が始まるまで、
全国の学校を訪問し続けた。その数は実に
140を超え、「グルグルバック」時代
で完結し、9年間続いた「ストレッチマン」
の幕が下りた。

「正直、あんなに楽しくては思っていないかった。『ストレッツチマン』という番組が始まるという風聞自体、完全に想定外だった。それでも19年間放送されたのは、何のためにストレッツチマンをやるのかという意識



番組15周年の特番や紅白出場時の台本、今より若い表情が印象的な絵本も。



後援番組のショーにゲスト出演。子供たちの輝く表情が、ストレッチマンの歩みを物語る。

「ジをわかりやすく伝える方法を、延々と議論していたのを覚えています」

放送開始3年目となる'96年、番組に転換が訪れる。スタジオを離れ、特別支援学校校校をロケを行うようになったのである。伏線となったのは、予想もしない形でストレッツチマンが注目されたことだった。

「高名な小説家の先生が、文芸雑誌のコララで取り上げてくれました。普及しつつあ

ったインターネットで、若い人を中心に噂が広がったのも大きかった。

そうこうしているうちに、学校の先生方から「実際に来てもらうことはできないんですか？」という問い合わせを受けるようになったんです。番組制作側でも、ロケてほしいのではありませんかという声が上がりました。

始めていたので、互いに自然な形で歩み寄っていったと聞いています」

この判断は吉と出る。ストレッツマンは全国的な人気を博していくからだ。とりわけ話題を呼んだのは、学校の先生が扮するユニークな怪人との対決だった。

最初は大先生の名前をもつて、怪人が多か

半にはパロディも増えて、『冬ソナ』の設定をバクった回までありましたね(笑)。むしろ、現場でのロケには新たな苦労も伴った。番組のディレクターはあらかじめ

ヒラズやI.V.I.を学校館に送り、車録まで
の1ヵ月でストレッツを練習してもらう手
はずにない。だががストレッツマンが
登場した瞬間、興奮のあまり動作を忘れ
てしまう子供が続出したのである。

と同時に字に苦悩たちには、NGを出すこ
とも許されなかった。ストレッツマンの収

釣は 基本的には一発釣り、それであれはこ

ンで、足掛け8年で出演を果たした先生にも出会えたし、ストレッツチマンがご縁で、2003年の紅白歌合戦にも出演させていだいた。番組を通して芸能界やスポーツ界でも、福祉活動に関わる人の輪が広がった。

宇仁官の指摘は正しい。彼は長い時間をかけて、障害のある子供たちにとって、いかにストレッチが有用であるかを認知させただけでなく、福祉活動のイメージそのものを明るくしたものに変えてきた。

「最近のことですね。時代の流れもあって通ってきたのは実感しています。放送の最後の頃は、子供と一緒に記念写真に納まつてほしいと、親御さんからすぐせがまれるようになりましたから」

いづれにせよ、黄色い全身タイツ姿のヒ

ローが社会の一部だと、ストレッツチに対する意識を確立させたのは間違いない。もちろん、土仁管の人生と体でも違いない。「自分は体が堅い方だったんで、出演が決まった時は「なんでお前がストレッツチマンなんや」と仲間にかかわれました。でも今では、かなり体が柔らかい方にな

「つたし、大きな怪我也せずに済んだ。これも番組のおかげです。ストレッツは体にいいし、やっぱり大切なんですよ(笑)」
現在、宇仁菅が「変身」するのは、後続番組のイベントなどにゲスト出演した場合のみに限られる。
しかし人気はいまだに絶大だ。ストレッツ

「デマーンが姿を現すや否や、子供たちは大声で名前を呼び、夢中になって手を振る。字仁蒼が目をきらりと輝かせ、足をがばりよと開く。ヒーロー登場の瞬間だ。今日はありがとう！ さあみんな、一緒にストレッチをやってみよう！」